

【書 評】

植村博恭・磯谷明德・海老塚 明

『社会経済システムの制度分析』

——マルクスとケインズを超えて——

名古屋大学出版会 1998. 12 xii+370 ページ

マルクスとケインズは超えられているのか

社会主義の崩壊後、改めて資本主義とは何かが問われている。とりわけ日本の経済システムにとって、それは緊急かつ最重要の問いとなっている。今世紀の最後の10年、資本主義だけが残った世界経済の最初の10年を、日本経済は低迷の10年、あるいは危機の10年として費やしたのであり、この現状を打破すべく、市場原理と資本主義原理の二つの主張が日本の経済社会を覆うのである。

もちろんこれは日本だけの話ではない。地球規模（グローバル）での市場主義と資本主義の席捲が社会主義の崩壊後の世界経済であれば、ここに成立するのがグローバル資本主義だということになる。「市場の声を聞け」、これが市場主義の主張であれば、地球規模で統合された資本市場の成立により、「市場の声」とは要するに、地球規模で鳴り響く「資本の声」となる。この意味ですべての国の経済システムは、地球規模での「資本の声」すなわちグローバル資本主義にどのように対処するのかが問われている。「市場の声」と「資本の声」にただ適応する、あるいは平伏すことが「改革」であるかのような雰囲気に対抗するためにも、資本主義とは何かを改めて問う必要に迫られている。

\*\*\*

以上は評者の個人的関心であるが、これに350頁の大著をもって応えてくれるのが、本書『社会経済システムの制度分析』である。表題にあるように、本書は近年多大の関心を集めている「制度分析」あるいは「制度の経済学」の観点から、「資本主義システムの制度分析」を提示しようとする。既存の制度分析の多くが「市場システム」のレベルに留まるの

に対して、本書は「社会経済システム」にまで掘り下げ、さらにそれを「資本主義と制度との関係」に絞り込むことにより、「資本主義システムを原理的に問いなおすこと」を課題とする。このような問題関心を掲げた書物であれば、評者ならずとも、読者は大きな期待をもって本書を手にするに違いない。

「資本主義を原理的に問いなおすこと」、この点に関して本書は実に丁寧かつ緻密な議論を展開する。それは著者たちの学問的誠実さを物語り、その議論に非の打ちどころはない。第1章のマルクスの貨幣論の再構築から、第2章のケインズの貨幣経済の再構築、第3章の企業理論の再構築、第4章の資本蓄積モデルの再構築、第5章の所得分配理論の再構築、そして第6章の多国籍企業論の再構築に至るまで、本書を貫く筋道は、「マルクスとケインズに対する理論的こだわり」であるという。ここからまず、貨幣と企業と市場という資本主義システムの制度的基盤を問いなおすことが課題とされ、次に、ここから貨幣と企業と市場に即して、資本循環のメカニズムが緻密に検討される。それはポスト・マルキジャンとポスト・ケインジャンの議論を軸として、フランス・レギュレーション学派とアメリカ・ラディカル学派を両輪として進められる。

このように本書で展開されるのは、マルクスとケインズに連なる議論であり、問題意識の鮮明さに応じて、そのまとめ方は簡潔かつ明瞭であり、ポスト・マルキジャンとポスト・ケインジャンの議論を知るためには、本書は今後、最良の手引きとなることは間違いない。本書は「教科書」という体裁をとるのであるが、正確には、「ポスト・マルキジャンとポスト・ケインジャンの総合（シンセシス）」と題すべき書物である。

もし本書の意図がこれだけであれば、評者が付け加えることは何もない。ポスト・マルキジャンとポスト・ケインジャンの二つのサークルとは門外漢の評者にとっても、本書が立派な評価を受けるものであることは容易に確信できる。しかし、「資本主義と制度との関係」から「資本主義を原理的に問いなおすこと」が本書の意図であり、それが読者の一人としての評者の期待であれば、その意図や期待は必

ずしも満たされないもどかしさが残ってしまうのである。要するに、肝心の「制度」が見えてこないのである。

\*\*\*\*

ないものねだりとして、本書を批評したいわけではない。本書はその副題として「マルクスとケインズを超えて」と題するのであるが、この二人の偉大な業績を「超えて」とはどういうことなのか、それが「マルクスとケインズに対する理論的こだわり」として、ポスト・マルキジャンとポスト・ケインジアンとの総合を意図することであれば、確かに本書で十分である。だがしかし、これによって、「資本主義と制度との関係」は十全に述べられているのか、たとえば本書の核心となる「資本蓄積の理論」において、ポスト・ケインジアンモデルが緻密に展開されるのであるが、そこに「制度分析」を見出すのは困難である。あえていえば、寡占市場とマークアップ原理を採用することが、そこでの「制度分析」のようである。しかし、これをもって「資本循環の中に組み込まれた諸制度」とみなすことは困難である。

ただこれに関しては、著者たちの日本の資本主義の制度分析が、別途に発表されているということがある（『戦後日本経済の制度分析』、山田・ボワイエ編『戦後日本資本主義』所収）。わずかに註において、著者たちの「階層的市場—企業ネクサス論」が紹介されているのであるが、「制度分析」と題した書物において、その具体的中味を省かれたことはやはり惜まれる。

もちろん、「資本主義と制度との関係」を羅列することが目的ではない。問われているのは、「資本主義と制度との関係」を解釈する理論枠であり、評者が問いたいこともこの点にある。あえていえば、ポスト・ケインジアンモデルを除けば、本書の理論枠はあまりにもマルクスに片寄っているように思われる。しかし、それは著者たちが意図する制度分析に真に繋がるものであるのか。

たとえば本書において、「資本主義と制度との関係」の根底にあるのは、「賃労働関係」のことだとされる。そのことに問題があるわけではない。しかし、そこにマルクスの解釈枠が適用されるなら、そこから導かれる資本主義論はアメリカ・ラディカル派経

済学のものになってしまう。もちろんラディカル派経済学を受け継ぎ、その命題をもって「資本主義を原理的に問いなおす」ことを目的とするのであれば、それでよい。しかし、その「産業予備軍効果」をもって日本やアメリカの資本主義を解釈することは果たして妥当か。マルクス学派にとってはそれは自明の資本主義原理である。ゆえに、ラディカル派経済学が提示したように、それは分析概念となる。しかし、そのような効果を制御する点に、「賃労働関係」に関するさまざまな制度の形成があるのではないのか。この意味で「産業予備軍効果」は分析概念としては有効でなくなり、もしあるとすれば、「賃労働関係」のある特定の制度が生み出す効果として解釈できるものとなる。だとすれば、そのような制度を生み出す要因が分析される必要があり、しかしそれはマルクス学派からは出てこない。

もちろん、本書においてはラディカル派仮説とは異なる議論も実に丁寧論じられている。その丁寧さと緻密さは著者たちの最良の資質を表すものである。ただそれゆえに残念に思うのは、マルクスとケインズに対する「こだわり」である。もちろん、「マルクスとケインズに対する理論的こだわりが本書を生み出した」と、著者たち自身が述べているのであれば、評者としてはこれ以上ということはない。ただそのような「こだわり」が、ポスト・マルキジャンやポスト・ケインジアンとして自己規定するのであれば、そのことは結果として、「社会経済システムの制度分析」という本書の意図自体を裏切ることになるのではないか、これが評者の「こだわり」である。

\*\*\*\*

何やら論難めいた書評となってしまったのであるが、これは決して評者の本意でないことをあえて弁明しておきたい。それは本書に対する評者の期待の大きさのゆえであることを了解していただきたい。そのうえで、最後に次のことをあえて述べたい。なるほど本書においては、制度の「ミクロ・マクロ・ループ」や諸制度の「構造的両立性」、あるいは諸制度の「接合」関係や「重層性」といった用語がちりばめられている。しかし、そのような制度論的アプローチのためのさまざまな用語は指摘されていたとしても、制度そのものについての議論はあまりに簡単に済まされている。ポスト・マルキジャンやポス

ト・ケインジアン文献はほぼすべて網羅されているのに対して、社会学や文化論からの制度に関する文献はほとんど見当たらない。これでは「社会経済システム」の制度分析としてあまりに狭いと言わざるをえない。

別の観点からいえば、たとえば制度の「マイクロ・マクロ・ループ」といった事柄も、マイクロをシステムの内部環境、マクロをシステムの外部環境として理解すれば、既存のシステム論で十分に説明可能である。これがいわば空間的に成立する「ループ」であれば、もう一つは時間的に成立する「ループ」であり、そこでは恐らく過去と未来との間の「ループ」が問題となる。恐らくここに、ポスト・ケインジアンではなく、期待に関するケインズのオリジナルがかかわってくると思われるが、しかしこうしたことが正面から論じられているわけではない。そうではなく、制度の説明そのものは、「人々を特定の思考習慣や行動に誘導する社会的装置」といったことで済まされてしまうのである。果たしてこのような理解は「ループ」といった考えと両立するのか、それはむしろ「ループ」といった考えを否定するのではないのか。

繰り返していえば、著者たちがポスト・マルキジアンやポスト・ケインジアンと自己規定するのであれば、これでよい。しかし、それは小さなサークルでしかない。新古典派経済学という巨大なサークルに対抗して自分たちのサークルを守り抜くというのも一つの行き方である。しかし、新古典派経済学の外部にはそれこそ巨大な領域が広がっているのであり、それこそが「社会経済システムの制度分析」の領域ではないのか。このような領域に踏み出すことが真の意味で「マルクスとケインズを超える」ことでないのか。著者たちとほぼすべての領域で問題関心を共有するがゆえに、評者の思いは、著者たちがマルクスとケインズへの「こだわり」ではなく、それを真に「超える」方向へと踏み出されることである。そのためには「こだわり」を精算する必要があり、実はそのための作業が本書であるのかもしれない。そうだとすれば評者の言葉は雑音として聞き流していただきたい。

[宮本光晴]